
悪口[改訂版]

ポイ宇宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪口【改訂版】

【Zマーク】

N2090C

【作者名】

ポイ宇宙

【あらすじ】

大親友の二人が、仲の良さを確認しようとしたが・・・

(前書き)

以前に書いた悪口の改訂版です。

ある中学校に俊、和也という少年たちがいた。二人は幼稚園からの幼馴染で自他共に認める大親友だ。和也が何かをしようと思うと、俊はすでに察知し、その手助けをする、逆に和也も同じことができる。すでに阿吽の呼吸も会得していた。それほど、一人の絆は強いものだった。もちろん、喧嘩なんか一度もしたこともない。どちらかと言うと二人で組んで他の奴らと喧嘩をすることはよくあつた。ある日、和也は夕食を食べ終わり、のんびりと最新の液晶テレビでお笑い芸人が司会をする番組を見ていた。画面では、所狭しと芸人は動き回り、しゃべる口がずっと動き回る。すると、話のテーマが昔懐かしいことに変わった。ゲストの年齢層はバラバラで10代はミリ団驅やヨー・ヨーなどを話し、20代はドラゴンボールや北斗の拳、30代はバブル期の話をしていた。一緒に見ていた、母がバブルの話に懐かしさを感じて、バブル期の話をさらに詳しく和也に話し始めていた。和也はそれを右の耳から左の耳へと通過させ、テレビに夢中。母はもともと話すことが好きなので和也が聞いていようが聞いていまいが関係ない、ただひたすら話し続ける。

ゲストが一人何か思い出したようなアクションを起こし、大阪で大人気の司会に話しかけた。

「そう言えば、昔こんな遊びありませんでしたか」

「どんなん?」

「えっとね、確か、仲の良い同士が、悪口を言い合って10個言えたら相手のことをよく知っているということが分かつて、仲が良いと確認できるっていう遊びなんんですけど」

どうやら、話を広げることが可能な話のようで、司会は笑顔になり、大袈裟にその話に同意した。

「あつたなあ、自分（お前）は誰かとその遊びしたんか？」

「しましたよ、でも5個しか言えなくてその後険悪なムードになりましたけど」

そのあと、その話がテレビで話しえられていたが、すでに、和也の耳には届いていなかつた。今和也の頭の中には

「明日、俊と言い合つてみよう」

といつ言葉がグルグルと駆け回つていた。

翌日、和也はいつもの倍の速さで身支度をしている。目覚ましの電池が切れていて、いつもの時間に起きることができなかつたからだ。何とか用意をして、学校まで全力で走る。がんばりにより、何とかチャイムが鳴るまでに校門をくぐることができ、ひと安心。

「おっす、なんだ疲れてんな和也」

激しく肩で息をしている和也の肩をショルダーバックをかけた俊が叩いた。

「おっ・・・はあ、おっす」

俊の家は学校まで徒步で10秒。当然彼はいつもギリギリの時間に家を出る。だから、一人は今偶然遭遇したのだ。和也は息を整え、昨日のことを思い出した。

「あっ、そうだ、俊」

「んっ？」

和也は昨日のテレビでのことを話し始めた。すると、俊のリアクションは和也の予想したものではなかつた。

「なんだよ、お前もかよ、俺から話そうと思つたのに」

まさに以心伝心。俊も昨日の番組を見て、今日和也と同じようにいたようだ。

これは、期待できるな、和也は心の中でそう思つた。

長い苦行と呼んでも過言ではない4時間授業が終了した。和也はまつそく俊と他の友達を集め、俊とあの遊びを始めた。

和也が先行。周りの仲間も楽しみという表情をしている。

「優柔不断」

まずは、最初だから、軽い軽い悪口。だが、この優柔不断は和也が一番気に入らない俊の悪いところだった。当然周りのみんなは知っている。

俊の番。

「ビビリ」

これもまた、俊が一番気に入らない和也の悪いところ。おかしなところまで以心伝心。

「ケチ」

「短気」

とこんな風に進んでいった。回を増すごとに一人の悪口を考える時間が長くなっている。

5回目。

「チビ」

一番言つてはいけないことを和也は口にしてしまった。俊は150cmの身長しかなく、女子よりも小さい、彼はそれが悩みでコンプレックスになつていて。和也はこのことは当然承知していた。しかし、予想以上に悪口が思いつかず、ついついこの最大の禁句を言つてしまつたのだ。

ピシッと空間が張る音が辺りに響いた。周りの仲間もそれはダメだろという雰囲気を醸し出している。誰が見ても俊の表情が変わつている。

「薄毛」

これもまた和也に言つてはいけない言葉ワースト1。さらに、雰囲気が悪くなつてきた。仲間以外のクラスメートもその気配を察したのか、一人のほうを無言で見るようになつていた。

「服のサイズが三歳児用でも着れる」

「育毛剤コーナー」

さらに、悪口は続く。一人の勢いにみんな止めることを忘れてしまい、見入つてしまつていて。もう、そこには昨日まで仲良く大笑い

をしていた二人の姿はなかつた。体は小さいけど男らしい俊、髪の毛が薄いけど人にやさしい和也。

「チビのくせに口リコンー！」

「性病持ちー！」

10回目が終わつた。その瞬間二人は立ち上がり拳を握りしめ振り上げている。ようやく周りが動けるようになり一人を止めに入つた。とにかく、凄い力で一人がかりでやつと止めることができるほど。

「放せー！俊をあのチビを殴らせろ！」

「なんだとー！かかつてこいよ逆に殴つてやるよ焼け野原頭！」

何とかクラスメイトたちの健闘により、その場は收まつたが、二人の相手に対する怒りは收まらなかつた。二人は卒業まで一度も会話を交わすことはなかつた。

クラスメイトの一人がこう言つた。

「あれつ？あいつらつて何のために悪口を言い合つていたんだ？」

「親友としての仲の良さを確認し、さらに深めるためじゃなかつたかな」

と隣にいた少年がそう言つた。

(後書き)

いかがでしたか、感想待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2090c/>

悪口[改訂版]

2010年11月24日09時05分発行